

# 文語の苑

メールマガジン第二十一号(平成二十四年三月)

小倉百人一首 十九 清原元輔

契りきなかたみに袖をしぼりつつ 末の松山浪越さじとは

古今集の東歌に「君をおきてあだし心を我がもたば末の松山浪も越えなむ」といふ(う)歌があります。末の松山がどこかについては諸説ありますが、今では宮城縣多賀城市とする説が有力なや(よ)うです。現に多賀城市には末松山寶國寺と云ふ(う)寺があり、江戸時代に松尾芭蕉が「奥の細道」の旅の途次この寺を訪れて居て、今この寺の境内には清原元輔の歌を刻んだ石碑が建てられてゐ(い)ます。歴史を溯ると清原元輔の時代から百年前古今集の東歌が収録される三四十年前の貞觀十一年に、一昨年(の)東日本大震災に匹敵する大地震と大津波が東北地方を襲ひ(い)ました。その時多賀城近邊の人たちは、海岸に近いけれども小高い丘になつてゐ(い)る、末の松山に避難して助かつたらしい。そのことがこの邊りの人々に強い印象を與へて、古今集の歌が生れたと思は(わ)れます。因みに一昨年の大津波も「末の松山」までは來なかつたや(よ)うです。

古今集の歌はあなたと堅く約束したのにもし私が他の人に心を移すことがあつたら末の松山を浪が越えるでせ(しよ)う、つまり「末の松山を浪が越えないや(よ)うに私はあなた以外の人に心を移したりは致しません」との誓ひ(い)の歌です。誓つてゐ(い)るのが男なのか女なのか、どちらとも考へ(え)られますが、古今集の東歌は民謡的な歌を収録したものとすれば、女が相手の男に對して心變りはしませんと誓つたと考へ(え)た方が民謡らしいのではないでせ(しよ)うか。

それに對して百人一首の清原元輔の歌は、心變り侍りける女に、人に代りて」との詞書があり、女に裏切られた男の「あの時一緒に涙まで流して互ひ(い)に心變りはしないと誓つたではないですか」と云ふ(う)怨みの歌を、清原元輔が代作した歌です。清原元輔は學問の家である清原家出身の學者・官僚で、村上天皇の御代に生きた人でした。一流の學者で、宮中の梨壺に設けられた和歌所の寄人として「古今集」に續く勅撰和歌集、後撰集」の編纂や當時もつ難解になつてゐ(い)た萬葉集の解讀に當りました。かの有名な清少納言はこの人の晩年になつてからの娘で父からとても可愛がられ、父が周防守として任地、つまり今の山口県に赴任したとき娘も一緒に行きました。清原元輔は學者らしく清廉な人で一生貧乏でしたから、七十九才になつても肥後守として今の熊本県の任地に行き、そこで亡くなります。この時清少納言は結婚してゐ(い)たので父に同行しません。

現代女流作家の田辺聖子氏は、清原元輔と清少納言父娘の明るい性格がお好きなや(よ)うです。元輔の歌の、怨みの歌でありながらさして深刻ではなく、歌全体としては軟らかなや(よ)さしい愚痴程度になつてゐることを、娘の清少納言とも共通する性格の明るさと評價されます。源氏物語の宇治十帖と同じ、末の松山」を歌つた波こゆるころともしらす末の松待つらむとのみ思ひけるかな」と云ふ(う)歌があります。愛人の浮舟に裏切られた薫大將の歌です。田辺氏はこの歌にこもる、しんねりむつりした…あてこすり」を清原元輔の歌と比較して、清原元輔・清少納言と紫式部との「氣質の違い」を見て居られます。紫式部には辛い見方ですが、面白い見方はあると思ひ(い)ます。

# 文語の苑

メールマガジン第二十一号

心の水も通ひてぞすむ 愛國百人一首を讀む(十七)

行く河の清き流れにおのづから心の水も通ひてぞすむ 徳川光圀

「行く河の」と言へば、賀茂長明の方丈記冒頭の

ゆく川の流れは絶えずして、しかもとの水にあらず

がすぐに思ひ出されます。行く河には即ち水が絶えず流れてゐて、その水は決して同じものではないのです。このことを踏へながら、掲出の歌を鑑賞してみませう。

一刻も休まずに流れてくる川の水が清く澄んでゐるのを見てみると、自然と心の水も澄んでくる。考へてみると我が日本ではどの川の水も澄んでゐる、さうして日本人もこの清い流れに皆が心を澄ましてゐるのだなあ。

「この歌の中心は「通ひてぞ澄む」の結句にあり、日本人は流れの水と同じやうに、一人一人は同じではないが、日本の川が澄んでゐるやうに、自づから共通して心が澄んでゐるといふ意味を表してゐます。つまり「通ひて」には清い流れが自分の心に通じて來ると、このことは日本人全體に共通してゐるとの二重の意味が籠められてゐます。

光圀は世に水戸黄門の名で明君として有名ですが、一方亦優秀な學徒として十八歳の時既に修史の志を立て、明暦三年三十歳で大日本史の編纂を開始します。以來元禄十三年薨るまで編纂に盡力し、就中三大特筆と言はれる、一、神功皇后は天皇とせず、二、大友皇子の即位を認める(弘文天皇)、三、南朝を正統とするの三點を明記し、又元禄五年には楠木正成の碑を湊川神社に建立する等、劃期的な歴史觀を示しました。

同時に萬葉集の研究にも意欲を示し、契沖に依頼した注釋書、元禄元年成立の萬葉代匠記初稿本に對しても光圀の見識が反映され、同三年これが同書精撰本となつて結實し、國學の基礎となつたこともよく知られてゐます。

掲出の歌は、光圀がこのやうな生涯の活動を通じて、日本の國や文化に對する愛情を深めていつたことを示してゐるやうに感じられます。「行く河の清き流れ」は長い日本の歴史が清く美しく、その歴史に觸れる日本人も亦皆心を澄ませてきたこと、さうしてその清い心が萬葉集を始めとする古典を産んできたことを聯想させます。かうして醸成される愛國心こそは我が國獨特のものであると、愛國百人一首の撰者達は考へてこの歌を選んだのに違ひありません。

なほ、大日本史は二百四十九年後の明治三十九年に完成します。その編纂が行はれた史局は、最初江戸神田の別邸から、十五年後の寛文十二年江戸小石川の本邸に移り、彰考館と命名されました。また水戸黄門漫遊記は明治初期の講談の作品です。

# 文語の苑

メールマガジン第二十一号

## 文語歌曲「南朝五忠臣」

明治政府は發足直後の明治五年に早くも太政官名で學校制度を出發させ、下等小學教育に十四教科を當てましたが、その一つに「唱歌」がありました。ところがその中で「唱歌 當分之ヲ闕ク」と除外されたのは、五線の樂譜はない、伴奏樂器はない、教師はあないとない盡くしたたからです。もちろん作曲者らしい作曲者もあなかつたのに、明治十一年には早くも日本最初の音樂教科書として京都では「唱歌」が刊行され、筑紫箏による伴奏を前提としてゐました。東京でも「保育唱歌」が作られました。これは宮内廳式部療の職員が擔當したこともあつて曲は雅樂が中心となり、有名であつた「越天樂」の使はれることは必然的でした。

「越天樂」は、本來の器樂曲に聲樂がつけられて謠曲や箏曲にも取入れられ、筑前今様として九州福岡藩で歌はれたものが廣く日本中で歌はれるやうになつたのが「黒田節」です。二十世紀に入ると管絃樂曲として近衛秀麿や松平頼則らが編曲し、カラヤンが指揮するなど、なぜか古くもあり新しくもある樂曲として日本人に愛されつゞけてきてゐます。

明治も十年代になると、歐化主義の反動も顯れて教育の中心には「德育」「智育」「體育」が据ゑられ、音樂は和洋の融合を目指しながらも儒教的な徳性を高めるために妙用があるとされました。そこから歌詞もこの歌のやうな歴史教育にもなり忠君愛國も稱揚できるやうな方向も出てきました。

時は南北朝、天皇親政を目指した後醍醐天皇は北條氏による鎌倉幕府を倒す畫策をしますが、その計畫が事前に洩れたため、天皇は笠置山に逃れて倒幕の兵をあげます。それを知つて反幕に動いた武士の一人が楠木正成です。しかし事は破れて帝は隱岐島へ流されますが、その途中で帝の奪回を計つて失敗し、櫻の木を削つて「天莫空勾踐、時非無范蠡」と記し、志を示したのが武將児島高德でした。帝は一年もしないうちに島を脱出、伯耆の豪族名和長年に迎へられて船上山に寄り、全國に呼び掛けて反撃を始めると、北條側であつた足利尊氏も反幕府に轉じて京洛を攻め落し、後醍醐天皇は京都御所に戻つてここに建武新政がはじまります。元弘三年（一三三三）のことです。しかし、公家が優遇されすぎて武士の不満は解消できず、尊氏が叛旗を翻して最終的には都を目指します。數萬の尊氏勢に數百で立向はうとした正成は、同行を願ふ長男の正行（まさつら）を櫻井の驛で歸らせ、自分は神戸湊川で尊氏と戦ひ最後には自刃します。湊川で鬼切鬼丸二ふりの名刀を振つて尊氏に立向つたのは新田義貞でした。楠木正行は成年になつてから尊氏の弟高師直（かうのもろなほ）と戦ひ、つひに四條畷で破れます。

- 一 笠置の山を出でしより／さして行方は定めなき、  
君をやすむるいさをしは／湊河原に残りけり。
- 二 國のためとて益荒男が／四條畷（しでうなはて）に散る花は、  
櫻井驛のいましめを／守りてかくはし菊の花。
- 三 春の彌生に夜をこめて／君に告げんと益荒男（ますらを）が、  
大和心を櫻木に／殘せしあとこそ匂ひけり。
- 四 寄る邊もなみの荒磯を／船上山にとどめてし  
君が心に忘れられぬ／忠義は山よりなほ高し。
- 五 雨やあられと亂れ散る／矢面に立ちてただひとり、  
稻妻あやなす二ふりの／つるぎに輝く忠と勇。

# 文語の苑

メールマガジン第二十一号

舊皇室典範の言葉遣ひ

(1) 舊皇室典範の第五章「攝政」(第十九條から第二十五條まで)に、面白い規定がある。條文の文語表現が論理的で、勉強になりさうなので、御紹介しよう。

## 第二十四条

最近親の皇族未だ成年に達せざるか又は其の他の事故に由り他の皇族攝政に任じたるときは**後來最近親の皇族成年に達し又は其の事故既に除くと雖皇太子及皇太孫に対するの外其の任を讓ることなし**

## (2)

この前にある第十九條では、天皇が未成年であるときには必ず攝政を立て、また、「**久きに互る故障に由り大政を親らすること能はざるとき**」には、「皇室會議」と「樞密院」の議を経て、攝政を立てることができる、と規定してゐる。(未成年者は**攝政にはなれない**)

攝政就任の優先順位は、まづ第一に「皇太子又は皇太孫」。その次が「親王及王」であり、さらに、その後、「皇后・皇太后」が来る。女性でも攝政になることができたのである。

第二十四條の規定は、次のやうな場合を想定すると解りやすい。

天皇が病身で大政を見ることができなくなつたとする。皇子はゐない。「最近親の皇族」は、天皇の弟Aで、年齢は十八歳。

しかし、Aは未成年なので、攝政に就任する資格がない。

そこで、代つて、天皇の父方の叔父B(成人/親王)が攝政になつた。

翌々年(條文の「後來」とは、「その後になつて」の意味/現代中國語の表現。中世後期以後の日本語には相當に近現代の中國語が入つてゐる)、A(天皇の弟)は成年に達する。ところが、さうなつても、「**成年に達し——と雖——其の任を讓ることなし**」とあるので、Bは攝政の地位をAに讓ることはなく、その後も攝政に留任する。

## (3)

右の事例のAが皇弟ではなく、皇太子だつたと假定してみよう。やはり十八歳。これをこととする。その場合、攝政はやはり叔父のBである。

翌々年、Cは成年に達する。(天皇の成年は十八歳だが、皇太子や皇族は二十歳)

さうなると、攝政だつた天皇の叔父Bは、攝政を辭任し、Cが攝政に任ぜられる。

「**皇太子及皇太孫に對するの外其の任を讓ることなし**」とは、「**成年に達し又は其の事故既に除**」いた「最近親」の皇族が、皇太子または皇太孫である場合だけは、それまで攝政を務めてゐた皇族(B)は、その人に、「其の任(攝政の地位)を讓る」といふこと。

## (4)

「**攝政に任じたるときは**」といふ表現から、「任ず」には自動詞があつて、「任ぜられる」の意味になることが解る。これは漢文訓讀に由来する。

漢文では「任」は、「帝任道眞大宰權帥」(帝、道眞を大宰權帥に任ず)といふやうに他動詞としても使はれるが(英語の第五文型と同じ語順であることに注意)、一方で、「道眞任大宰權帥」(道眞、大宰權帥に任ぜらる)のやうに、自動詞にもなる。

# 文語の苑

メールマガジン第二十一号

(5)

「道眞任大宰権帥」の訓讀「任せらる」を見ると、自動詞ではなく、受身のやつであるが、そもそも、他動詞と自動詞の関係は、能動と受動の関係に重なる所がある。

英語でも improve なじむ The climate improved his health. (その氣候が彼の健康を改善した) と他動詞に使われるのが普通だが、His health improved. (彼の健康は改善された) といふ使ひ方もできる。(後者の improved は was improved としても大差ない)

「改善する」「改善される」とき入ると、能動と受動のやつであるが、日本語を言ひ換へれば、「治す」(他動詞)「治る」(自動詞)といふことである。

日本語の「改善」も「彼の健康は改善した」といふ使ひ方が可能。英語の His health improved. と同じである。「改善した」「改善された」が同じ意味になることもある。

「自動詞(任)」を訓讀するのに、「受身(任せらる)」を使つても矛盾は生じない。

「帝任道眞大宰権帥」の「任」は make または appoint 「道眞任大宰権帥」の「任」は become (= be made ~ be appointed) だと思へば納得が行く。

(6)

第二十四條の「攝政に任じたる」は、自動詞として讀んでゐるのである。「これが本当の漢文だったら、學者は、「攝政に任せられたる」と讀むかも知れないが、漢文調の日本語としては、「任じたる」でも、非を鳴す餘地はない。

また、條文の中の「除く」も「消失する・なくなる・除かれる」の意味の自動詞として使はれてゐることに注意されたい。

(7)

大正十年(一九二一)、大正天皇の病状悪化により、皇太子・裕仁親王(昭和天皇)が攝政に就任した。以後、攝政宮と呼ばれる。(歐洲旅行から帰國してすぐ)

昭和天皇は明治三十四年(一九〇一)の御出生。

この数字を見て、「二十歳になるのを待つて攝政に据ゑたんだな」と思つたら早合點。

戦前は數へ年だから、二十一歳になつてゐた。成年に達してから、一年の餘裕があつたことになる。年末に就任したから、實質は二年の餘裕だつた。

高田友

# 文語の苑

メールマガジン第二十一号

## 肥前と三河

豊橋は愛知県の東端に位置し、低き山の連なりて静岡県との境をなす平野の只中にあり。西は内海に、南は太平洋に面し、北は信州への門扉となる山々のゆつたりと構へ居る。余ここに生まれし十八年後に東京に上りたれば、豊橋の記憶は、はや半世紀を遡る。

実家の傍に西郷石油なるガソリンスタンドありて、夏には店のをぢさんの下着のシャツ一枚にて、訪れし車に油を入れる姿今も忘れず。そのをぢさん、今ひとつの仕事もつとて、県境の山にて石灰岩掘りてはセメント会社に売ったり。標高の東京タワーの半ばにも達せずと見ゆる山並みのいづれも石灰岩より成り立てば、樹木の下はいくらもせずに岩盤に当たり、場所により剥き出しの岩塊すらあり。

小学生の折、さなる岩の裂け目より旧石器人類の上腕骨出づれば、牛川原人とぞ名付くる。程無きに、向かひ斜面より三ヶ日原人の骨見つかりけり。をぢさんガソリンスタンドに立たぬ日は、つるはしを持ちて岩を砕き、もつこを担ぎて山を下るは小学生の思ひ出なるに、その後の機械化甚だしく今は山の半分のみ残りて、急ぎ通り過ぎ行く超特急のぞみより、変り果てし山容を見る。その麓に西郷小学校あり、西郷氏の領地たり。

二代將軍徳川秀忠公の生母は、家康公の側室にありて美貌を謳はれし西郷の方にて、西郷氏の生まれなり。西郷氏は南北朝の折肥前にありて三河守護代に任ぜられ、そが本流肥前より三河に移動す。肥前にはわづかに庶流残りき。未だ松平氏勃興以前のことにて、かの岡崎城を築きたるはこの西郷氏なり。時代を下り、松平氏の勢力年毎に拡大したれば、西郷氏も漸次三河中を東へと移動し、現在の愛知静岡県境近傍に領地を定めたり。片や肥前に残りし西郷氏やがて南下し、つひには薩摩に至り、島津氏の配下として地歩を得たり。

西郷の方秀忠公を生みて、三河西郷氏大名に取り立てり。子孫の多くは親藩、譜代の重臣となり一族の命脈を保てり。取り分け会津藩にては筆頭家老の地位、代々三河西郷氏の裔務め、幕末戊辰戦争に際し、西郷頼母家老を務めあたり。片や官軍にありては薩摩西郷氏の裔なる西郷隆盛ありて、本流と庶流の思ひも掛け得ぬ遭遇実現す。この二人、共に己が出自を心得たれば、それゆゑの書簡のやりとりありて、明治の御世になりてなほ続けり。

かくして肥前佐賀にルーツをもちたる西郷氏の三河と薩摩に分かれ、更に全国に散りしことを思はば、三河と肥前とに縁のあるはさらなり、人の知らざるところにつながりあるを思ひたり。かくの如き話を余曾て佐賀にありて人を前に紹介せり。

# 文語の苑

メールマガジン第二十一号

## 朝の母親交通整理

朝、学童通学時間と同じ頃に家を出で、会社に行く。付近は住宅地なれどもこの時間帯、車の往来頻繁なり。通学路の要所要所に婦人立つ。旗を持ちて時に自動車を止め、子らの安全を確保す。

彼らは、児童らの母親にして、日当番を定め交代に立つものらし。過日の如く朝より雪降らば、相対の時間戸外に立つはさぞ冷たからむ寒からむと同情す。

この立ち番、学校又はPTAの取決めによるものと思ふ。シヨルダーバッグに朝刊を差しハイヒール履くは、働く母親なるべし。交通整理の後、家に寄らずそのまま職場に赴く出で立ちと見ゆ。彼等、さ無きだに忙しい朝に駆出さるるを気の毒に思ふ。

我、この立ち番に就きて気掛り有す。即ち、かの母親達全てが使命感持ちて交通整理し居るとは見えず。手に持つ旗にて自動車停止させつつ通り掛りの知人に会釈するはまだしも、親しき顔歩行者中に見つけ、お喋りに興ずる例珍しからず。話、興に入らば、彼が注意、車あるいは学童より逸ること必定。

然れども、誰かそを責むるを得む。いちいち交通整理の上手、責任感強きに限りて人を選び、さするにあらず。全員の持回りなるべし。しかも無報酬。受持の時間中ただ立つことのみを役目と解する人、不承不承の人、多多混る。更に、彼ら、自らの指示を自動車運転する人に強制する権限無かるべし。権限なき者、責任と責任感有せざるも仕方なし。その昔、「みどりのをばさん」朝夕に学区の交通整理す。これ有給の公務員なりしかば、相応の使命感を期待さるるの理由あり、且つ事故ある時は責任の追求も可なり。

他方、自分を守るべき大人近くに居らば、たとひ彼がお喋りに忙しく車の動きに無頓着なる時も、子らは大人に頼りて自ら自動車を見るに欠くること多かるべし。更に、通行の自動車は近くに大人居らば子らの不意の駆出し抑制さるるを想定し、子の動きに充分なる注意せざるもあり得む。

つまりこの母親交通整理、時には交通事故防ぐよりも逆にそが発生の誘引となることあり得べし。まかり間違はば重大なる結果を招きかねざる役目、家庭の母親に負はせ、しかも事故招く危険あるこの慣行、年年続くは如何か。

人を選びて訓練し、通行規制の権限を付与して責任を負はせ、報酬はこれ払ふを案として再検討すべし。財政苦しき環境は承知の上。安全はコストかけてこそ得らるれ。

兒玉稔